針葉樹會報
通卷第七十七號

木曾駒連峯を縱走せざるの記（其の一）

EMP

過ぐる八月十七日のよる十時四十五分、新宿驛頭には優にヤサシキ出發の光景が展開された。送らるゝは是れ、針葉樹會さやら言へる一味、いづれ劣らぬ怪しきいでたちせる六人の山男づれ、送るは是れ何たる對照の妙にや、世にも美しき三人の女性。いや、カンチヤンがニヤ〳〵するのもさこそと頷かれたり。だが彼女達決して怪しき者ではありません。これぞクマさんの幕下に在りて男勝りと謳はるゝ俊秀二孃と、銀座某デパートに其名も高き某孃。大將の薫陶宜しきを得ていづれも此道には仲々の熱心さ、その健脚ぶりは、既に今夏北アルプスで入道先生の折紙つきといふ頼もしさ。然も網棚の上に鎭座ます何やら綺麗な紙包三つ四つ、是なん我等が壯途?を祝して彼女等が心をこめたる贈物である。これには一同、いやはや何たる心掛よきオナゴ達であるかと、三嘆之を久しうしたのであつた。

かくて定刻到れば歡呼の聲に送らるゝ應召の勇士と、優しき激勵の言葉に張り切る六人とを載せた列車は、今にも泣き出しさうな暗憺たる夜の闇を衝いて一路西へ〳〵。

さて茲に改めて一座の面々を御紹介しやうならば、方や、飽くまでも伊奈川の谷を遡つて連峯を北から南へ踏躪り、果ては遙々伊那は大島の里までも足を伸ばさうといふ、ビヴアク覺悟のハリキリパーティー、クマ●カン●入道の三氏、こなた、伊奈川は東川本谷から木曾殿越に這ひ登り、空木、南駒からあはよくば、寶劍、本岳をも稼がうといふ、之も仲々に欲ばつたペン●皇帝●三郎の、ノンビリパーティーと誠に吳越同車の賑かさ。

× × × ×

明くれば十八日の朝、さすがに慣れたもので、思ひ思ひの窮屈な恰好をして、短い眠りを貪つた一行、何はさもあれ先づ氣にかゝるのは今日のお天氣だ。模樣いかにと見上ぐれば果してどうやら怪しい雲行きだ。鹽尻驛に名古屋行の上りを待つ頃は、神樣もこの珍らしい組合せにどうしたものかと御迷ひ遊ばされたものかどうやら持ちさうな樣子だつたが、その名も高い寢覺の床に寢不足の一瞥を吳れて、木曾路の小驛須原の宿に降り立つ頃には遂に神樣の御裁斷下つて、これは又ザン〳〵といふひどい降り。此時一同少しも慌はてず、「昨夜のカンちやんのあの凄い張切り樣ぢや斯く成り果てるは理の當然。」と云ひ度げな顏付。遙かに南國の空の下、炭塵にまみれて御奮闘せらるゝメイ氣象學者コンちやんよ。茲に近く發表されるであらう尊兄の博士論文に對して、貴重なるデータを提供する次第です。

餘談は扨ておき、須原の驛頭で熊さんに捕つたのが帝室林野局の御役人で田邊氏と云へる御仁。二三問答あつて、同氏の案内で驛の裏手にある御料林の軌道建設事務所に一同どや〳〵と繰り込む。聞けば昨日迄はとても良いお天氣續きだつたそうな。二萬分の一の地圖の詳しい記入に感心したり、御茶を御馳走になつたりして、このお天氣ではと云ふ田邊氏の勸告に從ひ、中八丁越えの豫定を變更して伊奈川の本流を行く事にする。御料林の小屋は自由に御使ひなさいさいふ同氏の親切な言葉を後に、雨の中を一同イカを着て出發。中に秀逸なのはペンちやんで、ルックの上に軍隊デントを引つ掛け、小型の婦人用洋傘ちよつと廣げてスタ〳〵歩くあのチンマリした後姿は寫眞に撮つておく値打ち十分であつた。

越阪を乘越して伊奈川右岸につけられたトロ道に沿つて進めば谷は漸く狹まつて濁流は滔々として耳を聾するばかり。

この時、帽子カンちやんの身代りとして、人身御供となるさいふいとも愉快なる事件が發生した。事の次第は丁度幾つ目かの短かいトンネルを出て一服した時の事だつた。一向に上りさうもない空模樣に業を煮やしたクマさんの、ふと目についたのが運惡くさつきからカンちやんの頭上で雨を吸つてゲチャ〳〵になつた鳥打帽子。「オイ望月、お前其の帽子棄てろよ、そうすりやお天氣になるよ。」かくて忽ち衆議一決。カンちやんもさる者、旗色惡しと見て取るやちつとも騒がず、徐ろに手近の小石を拾ひ上げると見るや、元は白かつたらしい件の鳥打帽に包んだかと思ふと、一同啞然とする位にいともあつさりと、かたへの濁流目がけて拋げ込んだ。斯くして今迄彼氏の貴重なる頭髮の忠實なる守護役たりし薄ぎたない鳥打帽子は御主君の身代りとなつて、哀れ伊奈川の藻屑と消え果てたり。神之を嘉し給へるにや、行く程に雨は段々小降りとなつた。

やがて越百川の出合も近くなると、路の左手に相澤の發電所が現はれる。眞新らしい社宅の並んでゐるあたりを素通りして、最後の人夫小屋で晝めしにする。雨に仕事を休んだ人夫衆が、無聊なるまゝに、珍らしさうにやつて來る。「ガールが居なくてサービスは出來ねえが……」と云ひ乍ら、火を起して居る所へ寄つて來て、手當り次第にそこらの破目板をバリ〳〵引つ剝しては燃して吳れたには呆れた。

徑は茲でトロ道と別れ、越百の合流點の少し先を左岸に渡つて小さな尾根を乘越す。このあたりから漸く險惡となつて行手には無數の棧道があとから〳〵と現はれる。一歩を誤れば河身まで七八十米の轉落は間違のないところ。相生瀧のしぶきを浴び、今倉澤の出合に到る頃、小降りになつた雨空を時々薄日が洩れる樣になつた。發電所でケーブルに連絡されたトロ道は對岸をこちらの徑路と殆ど等高に走つてゐる。

午後三時すぎ、須原を出て約六時間の後、ケサ澤の合流點着。雨はすつかり上つた。茲はさつきの相澤發電所の取入口で、對岸には飯場もあつて盛に工事中らしい。徑からちよつと入つた所に木の香も新らしい立派な小屋が建つてゐる。御料林の巡視小屋だ。明るいうちに東川の小屋迄はとても無理なので、時間は早いが此處に泊る事にする。さうと決れば氣は樂だ。小屋は玄關を眞中にして、左右に一間づゝ、四、五十人位は樂に泊れ樣といふ吾々にはむしろ立派すぎる位のもの。むしろはある、チャブ臺もある。土間には流しも備付けられてあつて、バケツ、鍋、ヤカンは云ふも更なり、茶碗、オ皿、杓子から箸まで添へてヨイ〳〵といふ完備ぶり。日が暮れゝば電燈も點いて、住心地正に百パーセント。煌々たる電燈の光りに、山に入つて最初の晩餐には、カレーチキンライスと夫々得意の腕を揮ふ。デザートにはフルーツ、紅茶、續いてピーナツツ、さては紅茶と、煙草の煙の中に嬉しい第一夜が過されて、胃の腑はまるでキスリングの樣に膨む。

夕霧が河身を軟かく包む頃、外へ出て見ると、眉を壓する樣に黑々と聳える峰々に限られた狹い空を、綿をちぎつた樣な雲がピンクに染つて飄然と流れて行く。

明日は多分晴れだらう。

× × ×

木曾の山ふところに第一夜は明けた。

眞先に袋から這ひ出したペンちやんが火を焚きつけてゐる。昨夜あまり詰めこんだ故か食欲がない。敵のパーティー盛にピッチをあげてゐる。入道氏のキャバシティーは正に驚嘆に値する。

豫定より一時間遲れてお發ちは六時半。豫想を裏切つて何となく釋然としない空模樣。だが大した事も無ささう。第一こう降られては、カンちやんの棄てるものが無くなるだらう。

相も變らず棧道又棧道と徑は大した登りもなしに、本流を遙かに見下して行く。時には獨木橋と棧道の合の子みたいな奴があつてブラン〳〵と上下に搖られて氣味の惡い事夥しい。對岸に糸瀬山南肩の顯著な崩壞を見上げ乍ら暫く進むと、糸瀬山の眞正面のあたり、白ナギにぶつかつた。無事通過して小一時間もすると、第二のナギが現はれる。此奴も大した困難もなくパス。

行けども行けども盡きない棧道の連續に、いゝ加減嫌氣さして來た頃、右手から小澤が流れ込んで來た。これが岡上、澤記號のある奴だとすると、東川本谷の出合も近いと勇んで尙も進むと、十米位の立派な橋のある稍大きな澤に出た。東川にしては少し小さすぎるがと、一同ドッカと荷を下してパンを嚙る。上流を見上げ乍ら、どうも東川本谷にしては貧弱だなあとカンちやんと話し合つたのだが、果してそれから四十分の後、本物の東川谷が堂々と現はれた。後で出合つた鮠釣りに熊さんが訊ねた所によると、

前の小澤は圖上に水流記號のある奴で「ヲル谷」と云ふんださうだ。出合にはえらく立派な釣橋が架つてゐるが、橋板が無く一同オッカナビックリ之を渡る頃、一しきり激しい雨がやつて來た。やがて途が河原に下る頃、突然「鮠釣りがゐる。」と熊さんが叫ぶ。どれ〳〵と樹間をすかして上流を窺つたが見えない。徑が再び高みに登る頃、川原をどん〳〵進んで行つた熊さんと何やら話しをしてゐる釣師の姿が目に止つた。熊さんの眼の早いのに感心してゐると、急にあたりがポッカリ開けて、如何にも眞新らしい小屋の前に出た。これが第一夜の宿りを豫定してゐた東川御料林の小屋だ。今朝澤の小屋と殆ど同型同大、一度は泊つて見たい樣な感じがする。(續く)

多良岳と久住山に遊ぶ

近藤

夏、而も九州第一回の夏、是れは僕には相當の恐威であつた。然し「戰線の勇士を思へ」なんて叱られると一言もない。其處でこんな時は却つて炎天、山に登つたら如何なる生理現象を呈するだらう、既に體重は大牟田着以來二貫匁も減少して居るので其の臨床學的效果に對する實驗材料に供して見た。

處が矢張り異ふれ。高さはたつた千米餘であるが其後に於ける身體各機關の活動頗る旺盛となり體重はぐん〳〵加はり、此の調子〳〵と元氣づいて三日程して續いて久住山塊に遊んだ。其後の體の調子、只物凄いの一語に盡きる。食事なんて此の暑いのに一日四回は確かに食へる。僕の體は矢張り山に登らねば到底生きてゆけない體であつたのです。

こんな生理的效果を實藥的效果なみに諸賢に吹聽して今更恥しい。それにも增して嬉しかつた事は今度の多良、久住山塊を見て九州の山々が急に好きになつた事である。

當地に來てから天山、寶滿山、三群山、等々の山に登つて見たが何にか其處に物足らぬものがあつて親しめなかつたが多良岳で流した一升五合の汗を思ふと一寸嬉しくなる。

多良の最高峯經ヶ岳足下には大村灣が鏡の樣に波靜まりその向ふに雲仙が聳へて居た。海と山との相調和した景觀、是れをぢつと見つめて居ると身は九州の一角にあると忘れて天上の國に悠々遊んで居る樣な氣がする。

そして山を下つて自動車發着所に來て見たら既に自動車が出た後で致方なく三里の田舍道を炎天と流汗にまみれて二時間で歩いてしまつた。汽車に乘りおくれると其の日には大牟田に歸れなくなるので一生懸命、足には一錢銅貨位の豆も出來たし、汗も此處で一升五合位出した理である。

それに比べると久住山は樂であつた。多良が結局、體の調子を造つてくれた爲めでもあるが仲々面白かつた。

久大線豐後中村驛から飯田(ハンダ)高原を自動車で登るのであるが一寸八ヶ岳の高原を思はせる處がある。風は飽く迄冷めたく、氣は飽く迄澄んで、そして遙かに久住の山々が高原の彼方に盛り上つて居る。そして更に面白く思つた事は此の自動車が全然道の無い草原を勝手に走る事と其の終點に寒地獄と云ふ「冷い温泉」がある事である。

一臺のフォードに十四人乘つた。補助席にも四人、運轉手席も

四人、それに自動車の兩側に一人づゝぶら下つて居る。是れが道の無い草原を走るのであるから大變である。今にも自動車が四分五裂になりやせぬかと思はれる位猛烈にエンヂンをかけて、そしてしまいに力盡きて登れなくなると二三人下りて自動車は一度後へ退り又勢つけて下から馳け上る。

而も十四人も乘つて居るので身動きも出來ない。上下前後左右にゆすぶられる事約一時間半、(これですつかり腸が治つて下痢が止まつてしまつた　くたくたになつて寒地獄に來た。

此處が又愉快である。涌き水(實に冷い)を引いた槽がある、是れに口唇を紫色にして三分位我ん張る。次に此の水を樋から落して居る。是れを頭からぢあ〳〵かぶる。これで一同はすつかり頭腦明析になると云ふ效能書が書いてある。そしてすつかり冷めたくなつた體を暖める部屋がある、十人中二三人は此の部屋で倒れるそうである、而も部屋に書いてある事が仲々面白い。

「倒れる人も相當あるが倒れても心配する事はない」

此　文の中「倒れる」を「死ぬ人」と置き換えて讀んで見た處側に居た入湯客が吃驚して僕をにらんで居た。宿の人かも知れない。

久住山頂からの眺めの美しかつた事や大船山頂の牛の襲來等色々憶出もあるが、「坊ヶつる」の一隅にある法華院温泉位思出深い温泉も少なかつた。此の夜野天風呂から滿月に明るくなつた「坊ヶつる」盆地を飽かず眺め得た事である。

こんな處で會員諸兄と一緒に「紫の雲搖らめけば」を歌えたら更にどんなに愉快であつたらう。全く寢てはもつたいない夜であつた。そして翌日午前中大船山に登つて正午から鍋割峠を通つて久住高原をぶら〳〵鼻歌を歌ひながら下つて來た。連れ一人の二人旅。遙か高原の果てには阿蘇の山々が夕燒に照り返つてくつきりと空に浮んで居た。そして再生した心と體を祝福しながら足は愈々輕く久住町へやつて來た。

以上

ナンガ・パルバート　一九三七年（三）

大塚武譯

○破局の原因（一六七頁―一六八頁）

かゝる破局がどうして起つたか？　この問は正しく我々の問題となる。そしてこの間の事情を明らかにする爲　私はあらゆる探索を試みた。第四天幕地に於て我々は、大きいのは家程もある種々の大いさの雪と氷の碎片からなる、長さ四〇〇米幅一五〇米の大きな雪崩の跡を見た。この雪崩は幕營地の南方四〇〇米の、氷のテラスの緣から起つたものであつた。弛んだのは大きな氷塊であつたに相違ない。先づ第一に氷が短い急な斜面を滑落し、それに續いてその上の平な斜面が二米から三〇〇米位にわたつて動き出したのであらう。その際新雪層全部が引き込まれた事が考へられる。この雪崩の尖端及主部は幕營地の上で、即ち正しく斜面が再び急になる丁度その手前で靜止したのである。雪崩がこの樣に異常に遠くまで押し進んで來た事については、私には當時を支配してゐた特殊な事情が推察される。この不幸の起つた日はその前日と變らず極めて寒氣が嚴しかつた。十日、十一日、十二日、十三日、十四日と最低は零下二〇度から二三度の間を上下してゐた。

この爲に雪の温度はずつと冷く又粉雪狀態に留つて居り、かくして上から突進して來る氷に對して特に良き滑走面を作つてゐたのであらう。更にその上降雪は毎日續き積雪は一米から一米半に達してゐた。この多量の積雪とゆるんだ狀態との爲に、雪は特に之等氷塊と共に動き易くなつてゐたのであらう。雪崩は大部分雪から成つてゐたが、その中にはこの雪崩を起す動機となつた氷の碎片も混じつてゐた。

次に注目されねばならないのは、絶え間なく降つた新雪が雪面下深く天幕を沈めて、天幕は云はゞ一つの穴の中に置かれてゐた點である。スマート中尉が天幕を去つた十四日には、僅に天幕の頭が少し雪面に出てゐる程であつた。この爲に天幕は雪崩によつて運び去られる事はなかつた代りに、その位置そのまゝに穴の中に埋められてしまつたのである。實際發掘した際我々は、天幕がセメントで固められた樣になつてゐるのを發見した。雪は全てのものを全く固くおしつけ、驚く程何一つ破損せず、器具も撮影機機も全て完全に損傷を蒙つて居なかつた。それ等は全く一樣に全面を雪で閉めつけられてゐた。そして之は正しく我々の友についても同じ狀態であつた。彼等はシュラーフ●ザックの中にいさも平和な睡眠の姿勢で横つてゐた。一度でも目を醒したさか云ふ形跡もなく睡眠から死へ直接に入つて行つた樣に思はれる。手の位置や顏の表情は胴體の姿勢と全く同じ樣に、何等苦痛の跡をとゞめてゐなかつた。

不幸は六月十四日から十五日へかけて眞夜中少し過ぎに起つたに相違ない。この夜全隊員が同所に居合はし、天幕が又この場所にあつたと云ふ事は不幸を齎す事情の連鎖と云はねばなるまい。始め彼等は第四天幕をずつと下方に建設したのである。日記からするとこの場所は彼等にはとても不安全だと思はれた樣である。我々もその後この場所を見てみた。この場所は疑もなく、その後實際雪崩でやられた後の場所より危險であつた。そこで彼等はより良き幕營地を探したのであつた。ヴイーンとハルトマンとプエツフアーとヘップがこの場所を探し出したのであるが、一九三四年に第四天幕地とした場所は、恐らくたかだかそこから一〇〇米西方に當る位の所であつた。そしてこの場所は安全であつたし、又不安に思はれた最初の場所も事實は危難をまぬかれてゐた。以上述べた樣に安全に思はれ、そしてこゝに移つたその平な盆地がかくも恐しい雪崩に襲はれたのである。

全隊員がこの天幕に一緒に滯在してゐた事は何か普通でない事であり、そして特殊な事情の重なり合つた爲にのみ起り得たのであらう。即ち打續く降雪が先登部隊の前進を妨げてゐたので、後方部隊及びその人夫達は之に迫ひついてゐたのである。不幸の起つた十四日には第五天幕それ自身は既に建設され得たであらう。ヴイーン、ゲットナー、ハルトマンはこの日人夫をつれて第五天幕に登つたのであつた。唯然し準備が未だ充分でなかつたので一晩だけ過しに再び第四天幕に歸つたのであつた。

結局全隊員が一緒に死ぬと云ふ事が運命の定めであつたと諦めるより外はない。（終り）

（追記）本年もドイツの遠征隊がナンガに挑んだが二三〇〇〇呎（約七千米）の地點から引き返へして了つた。

通信

○柿原謙一君より　（七月廿五日附　編者宛）

七月十七日夜上野を發して北海道に參りました。表向きは商用ですが餘り山師氣分や町人根性を出さず、呑氣に旅行氣分にひたらんとしてゐます。函館では林君に面會しました。彼氏には六月振りの面會で、餘りの嬉しさに餘り芳しからざる温泉にて、お酒を飲んだところ、餘り強くない上に胃の弱い小生忽ちにして降參遂に小間物屋さんになつてグッスリと寢てしまひました。凡ちやんは強いんですから、ジンゲル二人を相手に一人で飲んでゐんです。六ヶ月振りの面會、斯くも珍妙なものでした。

室蘭にも參りましたものゝ、急がしく、高見氏訪問は中止、直ちに札幌に參りました。アカシヤの並木あり、ヨキ處ですがやはり上高地の方がよい。八月五、六日に歸京します。貴兄何處ぞ山の計劃でもありますか。僕は上高地に一週間位でも是非入つてみたいんですが。針葉樹會例會に出られませんでしたら、宜敷く諸兄に御傳言下さい。（札幌にて）

○鷹野雄一君より　（八月十二日附　佐々木君宛）

其後御無沙汰して申譯ありません。卅日の夜貴兄か電話して下さつたとの事相憎留守にしてしまつて大變失禮しました。あの翌日から一週間程栃木縣の方へ演習に行つたりしてゐたものですから、お詫びも斯くの通り後れてしまつたわけです、悪しからず。

扨てお暑い折から皆様お元氣ですか、今度の夏山は如何でした？　嫌に色々と新聞に書きたてゝゐる學校もある様ですが考へものですね。

澗澤の岩小屋がつぶれたとか新聞で見たけれどほんとですかね。山も二、三年御無沙汰すると現實の山に對する觀念がうすれて、ふとした折寫眞をみたり、音樂を聞いたり、美しい雲を見たりすると夢の様に昔がしのばれます。森川君に會はれたら宜しくお傳へ下さい。先は右乍簡單先日のお詫びまで。匆々（松本にて）

記錄

○谷川連嶺縱走　望月達夫　他三名

七月廿三日　半晴　夕刻土合に下車して夜武能小舍に至り一泊

七月廿四日　晴ガス　蓬峠—茂倉岳—耳二ツ—西黑澤—土合

會社の山岳會？の連中と同行。越後側は終日雲に包まれてゐたが、東南方は晴てゐて氣持よき山行であつた。

○武尊山行　吉澤一郎　望月達夫

七月卅一日　曇後雨（前夜々行）沼田からバスで花咲村から小一里の伊香原に下車。大品川からの普通の登路で前武尊の小舍に晝頃着。午後から大雨。

八月一日　雨の時々降る中を前武尊を經　鰍ヶ峯迄行つたが、眺望も襄もないので不動岳を經て川場口に下り、湯原の温泉でゆつくりのびて歸京。此の雨は全國的なもので別に二人のコンビのせいではないらしい。

○樺小舍行　柿原謙一

八月六日　晴　秩父（三•二〇）—落合（四•二五）—栃本（六•三〇）

八月七日　曇後雨　栃本（七•〇〇）—突出峠（一〇•三〇—四五）

樺小舍八一一•二五—一二•〇〇)—栃本(二•三〇—三•〇〇)—秩父

久し振りに秩父の原生林の中に入った。雨に降られて唐傘さして歸つた。

○大雪山と小函　林　俊介

八月十二日　快晴　層雲峽(五•三〇)—黑岳頂上(九•〇〇—一〇•〇〇)—黑岳小舍(一〇•一五—一二•〇〇)—層雲峽(二•〇〇)—小函(三•〇〇)—層雲峽(四•〇〇)

大雪山である。快晴に惠まれ、遠望がとても良く久しぶりに氣持のよい登山をした。小函はもう昔の小函でない。

○空木岳行　村尾金二　小柳二郎　新羅二郎

八月十八日　雨　木曾須原—伊奈川、ケサ澤出合御料小舍(泊)

八月十九日　曇後晴　小舍—東川御料小舍—北澤獵師小舍(泊)

八月廿日　晴　小舍—木曾殿越—空木岳—空木小舍(泊)

八月廿一日　晴　小舍—池山—赤穗町

(詳細は本文參照されたし)

○伊奈川溯行、中御所谷下降　吉澤一郎　望月達夫　佐々木誠

八月十八日　ペンちやん達と同行。

八月十九日　東川御料小舍にてペンちやんの一行と別れ伊奈川をつめて河原に一泊。

八月廿日　晴　伊奈川溯行、源頭の千疊敷にて、滿天の星を仰ぎつゝ泊。

八月廿一日　晴　三澤岳登頂。木曾駒主稜を南走し檜王峯から東に中御所谷(太田切川の上流)の源流たる濁澤に下る。途中で又一泊。

八月廿二日　晴　濁澤を下る。本流の出合迄に瀧大小五ツ。中御所奥の樵夫小舍—黑川發電所—赤穗町

此の夜伊那大島村のクマさんの親類に御厄介になり、カン、ニユウは翌日、クマさんは翌々日無事歸京。

消息

中川孫一君　電話新設(中野•七四三一番)

鷹野雄一君　松本市外淺間溫泉、枇杷之湯方へ居所を定む。

柿原謙一君　通信先は東京市赤坂區檜町國方部隊片岡隊。

森脇芳之君　神戸市灘區高尾通、一ノ八　篠原方へ轉居。

定例集會　八月十日(水)　於如水會館

出席者(會員)吉澤　渡邊　村尾　吉澤松　增山　鈴木　小柳　新羅　望月(部員)佐々木　森川　岩崎　原　宮城

現役連中の今夏の寫眞を拜見する。會員中からも續々登山計畫が現はれて、久し振りに活氣を呈した集りであつた。

柿原謙一君歡送會　八月廿五日(木)　於如水會館

出席者(會員)柿原　中川　吉澤　村尾　矢作　金田　久保田　吉澤松　勝田　增山　鈴木　小柳　新羅　望月(部員)森川　佐々木　榎本　岩崎　原　宮城　山田

仲間の一人、謙坊に赤紙が來たので早速例の通り寄合ふ。會を代表したクマさんの激勵之辭と共に、出席者一同の眞心こもつたサインある日の丸旗を贈る。謙ちやんの武運長久を祈る。

○尙松浦靜雄君も應召され八月廿九日同樣歡送會を開いたが、即日解除の由。悲觀しないで銃後の御活躍を切望します。